



# でびたにゅーす

(第10号)

2010年9月6日 茨城県立中央病院化学療法センター 発行

## 残暑お見舞い

酷暑の中、みなさまいかがお過ごしでしょうか？田んぼの稲もまだ8月末から黄色い穂をつけているのが目立つようになり、今はさかんに稲刈りが行われているようです。暑すぎて出来が悪くなっていないことをお祈り申し上げます。

当化学療法センターでは、暑さをいわず治療に通うみなさまのため、相変わらずスタッフ一同がんばっております。みなさまにとって快適な環境を作り、夏を乗り切っていきたいと考えております。

## 新任医師 自己紹介

今年4月より化学療法センターでお世話になっている森下亜希子です。もうすでにご存知の方、患者様もいらっしゃると思いますが、今までの人生や意気込みなど自己紹介をさせていただきます。

2005年3月に秋田大学医学部を卒業、その後秋田県の病院で研修をし、外科・主に乳腺外科医として働いておりました。結婚・出産を期に茨城県に引っ越ししてまいりました。今年4月より主に乳がんの方の診療をさせていただきたく茨城県立中央病院に赴任いたしました。

乳がんの患者様の化学療法について診療をし、一緒に戦っていく中で患者様からたくさんのことを教わり、学びたいと思い腫瘍内科医として働いております。また、乳がんの化学療法だけでなく、診断・検診、外科的治療にも携わっております。

乳がんの診断から治療までトータルに関わり、同じ女性として親身になって頑張りたいと思っております。また、乳がんの患者様だけでなく、すべての癌の患者様とすべての癌に対して戦っていきたいと思っております。これから何卒よろしくお願いたします。



## ♪あゝみゆずり〜くゞりさんと♪

### 癒 (6) 楽

いや、暑いですね。残暑なんて言葉はイヤミにしか感じられません。「20世紀現代(幽霊)音楽」で冷えるのも一法ですが、それでは癒しになりません…。こんな暑さは正統的に正面から勢いよく吹き飛ばしましょう。そんな音楽といえば、やはりヘンデルの「水上の音楽」と「王宮の花火の音楽」ということになりましょう。船遊びと、戦争終結祝典花火大会という、イギリス王宮の公式エンタテインメントのための野外音楽です。

小難しい説明は不要！聞けば納得！暑さよおさらば！ここは野趣あふれ豪快な、エルヴェ・ニケ指揮ル・コンセル・スピリチュエルの演奏でどうぞ。野外音楽であることを改めて実感させてもらえます。もう少し落ち着いた雰囲気聴きたいという方に、「水上」はラファエル・クーベリック指揮ベルリン・フィルもグッド！「花火」にはカール・リヒター指揮ミュンヘン・パッサ管のもの凄いの演奏の映像があるのですが、市販されていないものなのでお見せできません(泣)。かわりに同じリヒター指揮イギリス室内管で。(せう)

## 虫癒しの♡アロマ

### (7)

暑い夏です。蚊に刺されやすい方には辛い季節ですね。ということで、今回は虫除けスプレーをご紹介します。

【準備するもの】精油・・・全部で50滴くらい。

(全種類揃わなくても2,3種類でも大丈夫です)

ラベンダー15滴 ユーカリ10滴 ゼラニウム10滴

シトロネラ10滴 無水エタノール10ml

精製水またはミネラルウォーター 90ml

【作り方】エタノールと水をよく混ぜ合わせ、さらに精油を入れてよく混ぜ合わせます。スプレーボトルはガラス製がおすすめです。よく振ってから使用しましょう。

市販のものより安心して使えますが効力は劣るので、まめにスプレーした方がいいようです。

また、シルクやベルベットなどはしみる場合があるので注意して下さい。



「でびたにゅーす」 2ページめ



じゃよ



ちいがみくん



## でびた博士 (はかせ) の化学療法講座



### 第 10 回



### 病気でなく人間が相手

ちいがみ君(以後「ち」と略): こんにちは、博士。

でびた博士(以後「で」): おう、こんにちは。この前はクラかったが、どうじゃ? 少し元気が出たようじゃの。

ち: はい。博士のおデコを見ていると元気が出てきます。

で: うむ、一本取りよったな(笑)。キミも元気になるとアゴと頭頂のトンガリが鋭くなるようじゃの、え(笑)?

ち: 刺されたら痛そうでしょ(笑)? ところで、今日は緩和ケアの話でしたよね。

で: おお、そうじゃ。「医療に携わるひとが共通して必要とする基本的診療態度」が緩和ケアじゃと言ったはずじゃ。

ち: そう聞いてもあまりピンと来ませんね。やはり「緩和ケア」というと「ホスピス」で行われる終末期医療かなと…?

で: うむ。無理もないの。始まりは欧米でもそう言う位置づけだったからのう。今、緩和ケアと言った場合には、終末期医療も含めた、かなり広い概念になっておるんじゃよ。1980年代末に WHO が定義した「緩和ケア」は、がんやエイズなどの「不治の病で、治療に反応しなくなった状態になったひとを対象」にするものじゃった。これが 2002 年になると、「生命を脅かす疾患に伴う問題に直面するひとと家族に対し、疼痛や身体的、心理社会的、スピリチュアルな問題を早期から正確に評価し解決することにより、苦痛の予防と軽減を図り、生活の質を向上させるためのアプローチである」という定義になった。

ち: へえ。「治らない病気」が対象という考え方から「生命に関わる病気の早期から適応する」ということになったんだ。

で: そうじゃ。本人だけでなく、家族も対象になっておる。そして、痛みをとるだけにとどまらず、病気によって生ずるあらゆるつらさ、悩みが対象になっておるんじゃ。

ち: スピリチュアルって、守護霊でも呼び出すんですか?

で: うぎゃ! ? たしかに訳すと「霊的」だからそんな響きがあるのう。スピリチュアルな苦痛というのは、「自分が生きていることに何の意味があるんだろう?」とか、「自分が死んでしまうなんて恐ろしくて…」とか、「あのときあの人にあんなことを言わなければよかった」とかの自分の存在価値

に関するようにつらさでも言おうかな。

ち: 前回ボクが感じた「医学の未来がない」というのも?

で: ははは、なるほど。身体的苦痛に限らず、そのような人間として持つさまざまなつらさを理解し、対応するのが緩和ケアなんじゃ。現代医学は「科学」として発展して来た。人間も生物、物質の有機的集合体であると考え、その結果、治せるようになった病気も多いが、まだまだなものも多い。科学的物質的見方が発展すると、医療者側にとって「人間」ではなく「病気」が相手だという錯覚を引き起こしてしまう。じゃが、ヒトの組織や臓器、病気はあくまでもひとりの「人間」の一部でしかあり得ない。相手は「人間」じゃ。その上人間は物質としてだけでははかり難い「精神」やその活動に伴う「霊性」も持ち合わせておる。「全人的医療」と言うは易いが、そんなに簡単なものではない。

ち: そうですよ。ボクたち薬剤師(ボクはまだ卵ですけど…)や医師のような「体」をみる役回りのものが、病気の方の霊的なつらさや、社会的な問題に対しては何もできないんじゃないですか?

で: じゃがのう、われわれも医師や薬剤師である前に人間じゃ。その人間性を持ってすれば、目の前の病気の方の「つらさ」や「なやみ」を聴き、理解し、共感することはできるじゃろう。その上で、社会的問題の専門家—ソーシャルワーカーなど、精神科医、カウンセラーや場合によっては宗教家などに相談しながらつらさを解決していく方向を主導せねばならん。そういうチーム医療体制をつくること、そして何より体の苦痛に的確に対処することがわれわれに一番求められているんじゃ。

ち: そうですね。痛みがあったらやりたいことも満足にできませんものね。

で: 病気の方のつらさは発病時から始まる。病気や病態にのみ興味を持つのではなく、同じひとりの人間としてそのつらさを理解し、早期からの確に対応していく。これが緩和ケアの極意じゃ。

ち: 緩和ケアは早期から、人としてつらさをしっかり受け止めて、チーム医療で対応しましょう、ということですね。

で: お、今日は勝手にまとめよったな。そうじゃ、そうじゃ。

### 編集後記

暑さ寒さも彼岸までといいますが、こしは本当に秋がくるのかしら? と不安になります。みなさまもまだまだ暑さにお気をつけ下さいませ。(せう)